

私立と公立

—教師として目指していくこと—

末 佐和子（東京都立小石川中等教育学校）

はじめに

大学卒業後、文学部の恩師である立野正裕名誉教授から言われたことがある。「文学は学会の中にはない、語り合いの中にある。末、教育も同じだ。」恩師は、教室で、研究室で、居酒屋で、これからの私達の人生観が貧しいものにならないよう、情熱的に文学について、そして人間とは、生きるとは何なのかを語ってくれた。恩師はよく「にもかかわらず」という言葉を使っていた。例えば、「主人公は絶望した。にもかかわらず、生きる希望を捨てなかった。」といった具合に。私は恩師の文学の解説を“にもかかわらずの文学”と名づけ、自分の精神に反映させることにした。何か困難に遭っても、「にもかかわらず…」とつぶやくことによって、次の行動を肯定的なものに転じることができる。「いかなる絶望を経験しようとも、この世は生きるに値する。文学を通してこれを教えたい。」恩師の学生に対するこの向き合い方は、私に大きく影響した。泣き、笑い、ぶつかり合い、時に何かに翻弄されたり打ちのめされたりしながらも、人と語り合う中で生まれる“感性の交流”から、人生や働くことでの喜びを発見することが、私の教職における姿勢の土台となったのだ。

その後、私は私立中高に英語教師として就職、8年間勤務し、そして2017年4月より都立学校で働いている。在職中の8年間は、私立の強みと弱み、そして学校教育が抱える現状と課題に対して、私立が取り組めることと取り組めないことに直面した。そして、教師としてのキャリアを見つめ直した時、私が次のステージとして選んだのが公立学校での勤務だった。私立、公立問わず、多忙な日々の中で私を支えるものは、恩師や先輩の先生方との語りいの中で、教師としてのアイデンティティをよく見つめたところにある。

今後、世界屈指のスピードで変化するこの日本において、教師として生きていくのは容易なことではない。本論では、教師としての志をどこに置き、何を大切にしながら行動していくのか考え、「教師として目指していくこと」を探求する。

第1章 私たちが生きるこれからの日本とは

本題に入る前に、まず私達が生きるこれからの日本社会を考えてみたい。2017年時点の日本の人口はおおよそ1億2653万人だが、2055年には9000万人まで減少すると言われている。日本の人口減少は、世界屈指のスピードである。河合雅司の『未来の年表』によれば、東京都は2025年から人口減少が始まり、2030年には東京郊外がゴーストタウン化、そして2045年には都民の3人に1人が高齢者と予想されている。

「教育産業、冬の時代」という言葉を見かけたことがある。少子化と生徒や保護者のニーズの多様化という波の中で、教育産業は“魅力あるもの”しか生き残ることができない。既に、高校の数においても1988年から2016年までの間に587校もの学校が統廃合によっ

て減少している。私立は二次募集や編入試験などで定員確保を目指し、公立は統廃合を繰り返しながら教育改革を迫られている。どちらも「魅力ある学校とはどういうものか」という問いへの独自の答えがなければ、生徒や保護者から選ばれる学校にはならない。2018年から更に18歳人口が減少し、公立の統廃合は加速、私立は経営危機に見舞われることになる。2030年には、働き手が現在の8割まで減少し、3人に1人が65歳以上となる。日本の国際的存在感が低下する。AIが台頭し、消える業種と雇用が生まれ、生徒の進路選択も大きく変化する。未来の生徒がこのような社会を生き抜くために、私達教師の役割は何だろうか。

私達が向き合う中高生は2100年、つまり22世紀まで生きると言われている。我々は自分の一生だけで物事を考えるのではなく、その先の未来まで思いを馳せる精神を持たねばならない。このような前提を踏まえて、教師として何を大切にするのか、見つめ直したい。

第2章 私立と公立

第1節 私立での経験 — 仕事の答えはどこにあるのか

明治大学での免許状更新講習の際、山下達也先生から「教師のライフコース」について教えてもらった。日常的な実践や経験を振り返り、どのような教師でありたいか、あるべきかという問いへの向き合いと探求こそが、教職生活の全体を通じた教員の資質能力の向上に繋がるという考え方である。そこで、私の私立での経験を振り返りたい。

大学卒業後、私はイギリスの大学院に留学し、帰国後すぐに都内の大学付属私立中高で働き、7年間学級担任として学級運営を任された。7年間の思い出は数えきれないが、その中でも特に2つの出来事について述べたい。

帰り道の電車で、目頭が熱くなったことがあった。あれは私が初めて卒業生を送り出す年だった。まだ20代で経験が浅く、生徒を叱責することで彼らのやる気を出すという指導しかできなかった私に、子どもの大学受験の合格のお礼を伝えにと、ある保護者の方が両親揃って来校されたのだ。私は驚きとともに温かく幸せな感覚をおぼえた。「若いからなめられてはいけない」「他大学進学クラスの担任なのに進路指導ができないと思われてはいけない」と気を張っていた自分には予想できないことだった。その後、何度か保護者から感謝される場面があった。(分科会配布資料に一部抜粋を掲載。)教育に携わることの喜びは無数にあるが、生徒達の成長を保護者や同僚先輩と一緒に共有できることは、大きな喜びの1つであると感じている。感謝される経験が私を教師として育ててくれた。

そして、担任として5年の歳月が流れたある時、世の中の大きな流れの中で、私の勤め先の私立も例外なく学校教育改革に取り組みようとしており、教育内容、人事、教師間の人間関係等で様々に動きがある年であった。そして、私の中である感情が溢れ出てきた。一生懸命働いても、学校から評価してもらえない、認めってもらえない。時の英語科主任であった増淵匡一先生に自分の気持ちをぶつけた。「先生、どんなに一生懸命やっても管理職から評価してもらえないじゃないですか。」と。その時、主任の先生は一言言った。「生徒からその答えをもらえばいい。」私ははっとさせられたのだ。自分の頑張りを分かってもらい

たいと、自分の心の座標軸が自分の内でも生徒にでもなく、管理職にあったのだ。自分の仕事の答えは生徒からもらう、つまり私は生徒に何を伝えることができたのか、生徒が担任の私と何を共有したのか、そして生徒が豊かに成長できたのか、それが未来へ繋がるものであったのかが大事であり、生徒から答えがもらえなかった時はまた研究と工夫を積み重ねるほかないということなのだ。主任との会話からしばらくして、私が担任として受け持ったクラスの卒業式があった。奇しくも、その時の謝恩会で生徒から読んでもらった手紙から“答え”を受け取ることができた。(分科会配布資料に一部抜粋を掲載)

社会人として何らかの組織の一員として生きる以上、他者の評価がなければ、自分の頑張りや情熱を維持することが困難であるという、自分達の脆弱性を認めねばならない。それを認めなければ、いつの間にか評価のための仕事となるか、もしくは慢性的な諦めの中で仕事をする事になり、本来の教育の目的から外れる。確かに他者からの評価は大切であるが、しかし、それよりもその自分の脆弱性に打ち克つものが欲しい。それは、自分の情熱の根源、つまり志、自分自身を持つことである。高校の英語教育で最も私が尊敬している和田玲先生から「一度掴んだ理想は手放さないこと。諦めず悩み、考え抜くこと、学び抜くことからしか人は突破口を見出せないから。」と言われたことがある。高校3年生の担任を3回受け持ち、生徒にやりたいことに挑戦するよう、自分に正直になるよう伝えてきた。人生は一度きりだ。私自身の人生も挑戦するものでありたいと思うようになった。

第2節 公立へ — 新たな刺激と安心感

そして、私が次のステージとして選んだのは、公立での勤務だった。1年前この明治大学教育会で昼間一雄校長先生と出会い、「東京都の人事の規模は大きい。あなたが尊敬できる先生に必ず出会える。」という言葉ももらった。確かに、東京都には、高等学校に9849人、中等教育学校に437人もの教師がいる。私はその出会いの可能性に飛び込むことにした。私は、先行き不透明な時代だからこそ、夢を見させてもらえる場所で働きたい。

公立で約1年間働き、今、私立の捨て難かった点だと感じることは、「先輩、ベテランの先生方との家族的な温かい人間関係」「深い仕事のチャンス」「建学の精神から得られる教師としての教育理念の軸」の3つだ。特に1点目だが、私立では新規の専任採用は限りなく少なく、何年経っても自分がいつも一番年下で「末ちゃん、末ちゃん」と可愛がってもらっていた。仕事の先輩というより人生の先輩という立場で助言をくれ、甘えたいと思えば甘えられ、自分がやりたいと思ったことを実践させてもらった。私立のベテランの先生方の情動的な付き合い方が恋しくなることが多々あった。

一方で、私立では得られない刺激と安心感をもらった1年でもあった。今まで出会ったことのない先生や生徒にも出会い、新しい刺激をもらった。組織体系としても、何かあれば頼りになる管理職の先生方に相談できる環境がある。天井が見えない梯子を登るような感覚の働き方から、目の前の仕事に邁進できる働き方へと変えてもらった。

第3章 教職への哲学

第1節 人生の方程式

志や信念を貫こうとすればするほど、生きづらさや働きづらさが生まれてくることも事実だ。自分らしくありたいと願いながら、信念を貫き、優しさを持ち続けて働くことは難しい。そこで、京セラ名誉会長の稲盛和夫氏の“人生の方程式”に触れたい。

(1) 人生の方程式

$$\text{人生・仕事の結果} = \text{考え方} \times \text{熱意} \times \text{能力}$$

稲盛氏が定義する人生の方程式は、考え方、熱意、そして能力が、足し算ではなく“積”で表される。つまり、能力があっても、“考え方”がマイナスであれば、仕事の結果はマイナスになる。志を持ったら、その志に沿った働き方になるのだ。「何を大切にしているか」で働き方が変わってくるというのだ。授業、部活動、同僚とのチームワーク、自分への評価、何を大事にするかで自分の働き方も変わる。

誰のために、何のために目の前の仕事があるのか、私達は問い続ける必要がある。そして、自分の哲学を持つことが、自分自身に対しての「責任」にも繋がると私は思う。「生徒が勉強する理由」「新しい学力観」「生徒が身につけなければならない力」「教師という仕事の性質」という項目に分けて更に考え、私なりの結論を導いていく。

第2節 なぜ勉強しなければならないのか — 新しい学力観と生徒が身につけるべき力

もし生徒から「なぜ勉強しなければならないのか」と問われれば、まず吉田松陰の「学問は公のものでなくてはならない」という言葉が浮かぶ。勉強で身につけた知識や知恵は、自分を守るだけでなく、他者や社会のためにもなる。では、“学力”と言葉を絞ってもっと具体的に思考を深めるならば、どのようなことが言えるだろうか。新しい学力観として、明治大学の諸富祥彦教授は「問題を発見する能力」、齋藤孝教授は「クリエイティブな問いをつくる力」と述べている。諸富教授の著書では、革新的商品開発には“問題解決的思考”ではなく、“問題発見能力”，つまり問題が起きた時にどれをどう処理すればいいかではなく、世の中に足りないものや必要なものを発見する力が必要だと書かれている。AIが発達する時代になると、知識はAIのほうが勝っている。これからは、他者とコミュニケーションを図りながら、「なぜ」という問いを持って問題を発見する力が大切になるだろう。

そして勉強したことを、他者や社会のために使うには、夢や希望も必要となる。では、夢や希望をもって生きるために、生徒は何を身につけなければならないのだろうか。

(2) 生徒が身につけなければならない7つの力

①出合いに生き方を学ぶ力 ②夢見る力 ③自分を見つめ、選択する力 ④コミュニケーション能力 ⑤達成する力 ⑥七転び八起き力 ⑦社会貢献を喜べる力

諸富教授は上記の7つ定義している。この7つの力はいかにして身につくのだろうか。教師はどうすべきなのだろうか。

第3節 教師という仕事の性質 — 待つことの喜び

7つの力を身につけさせると言っても、教師として仕事をしていると、なかなか思うような結果が見えず、徒労感を覚えることが多くはないだろうか。明治大学の高野和子教授は、教師という仕事の性質を佐藤学氏の研究を引いて「無限定性、不確実性、無境界性」という言葉で表現されていた。生徒が何か成長したり、成功したりしても、その結果が、本人の能力によるものなのか、家族のおかげなのか、教師の指導のおかげなのか、限定できないし、確実に言えず、且つ3者に境界線があるわけでもない。

翻って、私達の仕事はそのような性質を保持しているにも拘わらず、自分たちの仕事を数値やPDCAの尺度だけで図ろうとしすぎているところがある。私は、最終進路先や資格検定合格者数など、数字を追い求めながらも、生徒や保護者からの言葉から自分の仕事の答えをもらいたい。しかしながら、生徒や保護者の言葉をもらうのは、これもまたなかなか容易ではない。容易でないからこそ、教師が“待つ”ことを喜びにできるかどうかが鍵となる。生徒が7つの力を身につけるには時間がかかるが、時間がかかるからこそ生徒の成長は喜ばしいものとなる。

第4節 私の志 — 団結と教養

イギリスに留学した際、クラスメイトにシリア人がいた。私が留学していた頃のシリアは平和な国で、私が日本に帰国したらぜひシリアに遊びに来よう言われた。帰国後、しばらくして内戦、いや、内戦という名の国際紛争が始まり、オセロゲームのような陣取り合戦は泥沼化、多くの民間人の犠牲者を出した。友人の家族は、トルコやヨルダンに逃げた者、そしてどこにも逃げられず国内に留まった者と3つに分かれたそうだ。この出来事は私の英語教師としての在り方を大きく揺るがした。

私にできることは何もなかったのだ。無力な自分への慰めとして1つ言うならば、唯一私にできたことは、忘れないで苦しみに耳を傾け、共有すること、その気持ちを相手に伝えることで相手の心に友情の風を吹かせ、連帯の気持ちを持つことだけであった。

難民が生き抜くために必要なことは2つあると言われている。1つは、「助け合うこと(団結)」そして、2つめは「他人から奪われないものを身につけること(教養)」だそうだ。家や財産は他人から奪われるものだが、自分が身につけた教養や学んだことは誰からも奪われないものだ。これは難民だけに言えることではない。恵まれた日本に住んでいる私自身において振り返っても、恩師や先輩から教えてもらったことは、誰からも奪われることなく、私が私らしくあるために、私を支えてくれている。分科会終了後、難民が生き抜くために必要な2つのことに関して、笹子隆雄先生から「これが本当の“生きる力”なのかもしれません。私の大切な宝物になりました。」と言って頂くことができ、涙がでるほど嬉しかった。お世話になった私立の先生方のもとを飛び出し、今私が公立で追い求めたいことだからだ。シリア人の友人とは、戦争という悲しい出来事が媒介となってしまったが、人種を超えて悲しみを共有したり、分かり合ったり、人間愛を深めたりできることを教えてもらった。異文化交流やリーディングの授業を通じて、「共感」「愛」「感動」を感じても

らい、そしてそれを他者理解に繋げていけるような英語教育を目指したい。

私立で未完になってしまったことが、公立で達成できるのかと問われれば、正直それは分からない。だが、たった1人の人間の情熱、1人の人間の信念、1人の人間との出会いが教育や我々自身を動かすということを忘れてはならないと思っている。

私の英語教師としての「志」は、世界の人が幸せになれるものとしたい。幸せとは、生命の危険を感じずに勉強し、教養を身につけることである。世界の人が幸せになれる生き方やコミュニケーションを目指したい。自分とは違う人と助け合い、人の役に立ちながら誰かから感謝される経験の中で、豊かな人間関係が築ける生徒を育てたい。

おわりに — 生きるということ

2008年、私が初めて教師生活をスタートした年である。同時に、12月の寒い日、1通のメールが届いた年でもある。「闘病生活の末、A君が亡くなりました。」A君は大学で同じサークルに所属した同級生だ。卒業後一度は民間企業に就職、そして「教師になりたい」とあっさり会社を退職、その後採用試験を受けることなく体調を崩し闘病生活に入ってしまった。A君がなぜ教師になりたかったのか、どのような教師を目指していたのか、一度も聞くことなくあつという間に天国へ旅立ってしまった。享年25歳であった。

私が、いかなる時も、目の前に山積している問題に対する愚痴に縛られることより、自分自身をよく見つめることに集中し、教師という仕事の魅力を、そして自分の働き方そのものを探求したい、自分が自分らしく愛を持って働きたい、という気持ちを持ち続けられたのも、A君の存在によるところが大きい。教師になることすらできなかった同級生の存在は、生きて教師を続けられることの意味を、何年経っても色褪せないものとして私に残してくれた。私が初めて投稿した教職に関する本論は、連帯の気持ちを込めて、最後まで教師を目指し、癌とたたかい続けた明治大学の卒業生、A君に捧げられる。

命の続く限り、生徒、保護者、先輩、同僚、後輩、書物との出会いから、煌めきを発見していきたい。後輩諸君にもそれを望む。

謝辞

明治大学教育会での発表の機会を頂くことができたのも、昼間一雄校長先生からの一声があったからでした。大変貴重な機会になりました。ありがとうございました。何度も事務連絡をくださった資格課程事務室広瀬清隆様、当日司会を担当して頂いた井内弘之先生、分科会に参加された学生の皆さん、一般会員の先生方、分科会の配布資料と本論を添削してくださった先生、明治大学教育会にて運営に携わったすべての方に感謝の意をここに表します。明治大学教育会の更なる発展を祈念して、本論を締めくくらせて頂きます。

【参考図書・参考資料】

- ・稲盛和夫(2017)『生きる力』プレジデント社
- ・河合雅司(2017)『人口減少社会とはどんな社会か』月刊高校教育

- ・河合雅司(2017)『未来の年表 人口減少日本でこれから起きること』講談社現代新書
- ・立野正裕(2017)『青春—サミュエル・ウルマンを超えて』未刊
- ・立野正裕(2017)『大地と天空を案内する者』未刊
- ・樋口大二郎(2017)『人口減少社会における地域活性化と高校教育』月刊高校教育
- ・成毛眞(2017)『AI時代の人生戦略 「STEAM」が最強の武器である』SB新書
- ・畑山博(2017)『教師 宮沢賢治のしごと』小学館文庫
- ・諸富祥彦(2016)『教師の資質 できる教師とダメ教師は何が違うのか?』朝日新書
- ・諸富祥彦(2017)『教師の自己成長と教育カウンセリング 教師の人生はミッションとパッションだ』図書文化